

# 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成29年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機 関 名	東京大学	整理番号	T01
プログラム名称	活力ある超高齢化社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム		
プログラム責任者	光石 衛	プログラムコーディネーター	大方 潤一郎
<p><b>1. 進捗状況概要</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中間評価を踏まえて、プログラム全体としての改善の取り組みははっきりしている。これにより、プログラムの掲げる当初の目標に向けて着実に進展するものと期待される。</li> <li>・ とりわけ、国際保健学専攻、国際協力学専攻がプログラムに加わり、国際貢献とグローバルな視野でのリーダー養成の方向性が鮮明になってきたことは高く評価できる。</li> <li>・ 本プログラム担当教員が関与している国際協力事業（海外との共同研究を含む）への学生の参加の道が開かれつつあり、これによって上記アカデミア外の経験が世界的な地平で行われ、学生への指導が本プログラムの枠を越えてより充実することが大いに期待される。</li> <li>・ リーダーシップの涵養の点については、学生の間でも理解の浸透と意欲の増進が確実になっており、アカデミア以外の世界への関心と実践経験が高められている。</li> <li>・ 海外インターンシップ、短期留学等の今後の具体的な計画が示され、制度も整えられている。学生による海外での学会発表等も積極的に行われるようになってきており、その成果が期待される。</li> <li>・ 日本に根を置いたローカルな経験が、グローバルな舞台で活躍するために必要であるとの実践的な認識が学生の中にしっかりと根付きつつあると感じられ、本プログラム推進上の懸案であったグローバル・リーダーシップへの意欲が鮮明になりつつあることは大いに評価できる。教員もグローバル視点の投げかけなど学生への意識付けに努力しており、プログラムの中に「自分にとってのグローバルの意味を考えるカルチャー」が醸成されつつあることが確認できた。</li> <li>・ 優秀な学生の確保については、これまでと同様に問題なく進んでいる。特に社会経験・職業経験を持った意欲と創意溢れる学生達の存在には強い印象を受けた。</li> <li>・ 編入制度によって人文社会学系の学生が徐々に増加しており、分野間の「異文化」交流の上で大きな意味を持ち、本プログラムの中軸である「工」・「医・看護」系学生からも肯定的な意見が得られている。</li> <li>・ 学生への指導を複数とすることで、学生を多角的に支える体制が整備されたと評価できる。</li> <li>・ 本プログラムで得られた成果が、体系的学術知として盛り込まれた講座「活力ある超高齢化社会のデザイン」が刊行されることとなっており、本プログラムの価値を広く社会に発信する取組として高く評価できる。</li> </ul> <p><b>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 上述の状況にもかかわらず、海外インターンシップについて義務としていないこともあり、未だに消極性が感じられる。そのため、この点についての学生とのコンセンサスを得る努力が求められる。</li> <li>・ セミナーのあり方については、学生が比較的自由に発表できる形式でのイブニングセミナーの再開が望まれるほか、事業を展開するための経済学的基盤に関する講義がないなど、部分的には不足感が残る。</li> <li>・ 現時点で外国人教員が欠けている点も改善を要する。</li> <li>・ 看護師など専門的な職業を持つ学生に対する就業可能時間への配慮が必要とされる。</li> <li>・ 人文社会系への一層の広報を行い、この方面からの学生の増大を図ることが求められる。</li> </ul>			

- 学生への経済的支援に関しては、特に大きな修正は見られないものの、学生の必要に応じて、適切になされている。ただし、本プログラムの特性上、奨励金の支給を希望する学生に対して日本学術振興会特別研究員への申請を義務付けていることに関しては、学生の間にも疑問とする声がある。
- プログラムの改善のために大きな努力をしている様子がうかがえるが、それがごく一部の教員の努力によって支えられている。言い方を変えれば、本プログラムがまだ多くのプログラム担当者（参画している特に人文社会系の教員）に真に理解されていない可能性が危惧される。そのため、プログラムの発展、定着のためには、プログラム担当者全体の更なる理解が求められると考える。
- 学生に本プログラムへのアイデンティティーを持たせ、さらに、グローバル・リーダーとしての意識を涵養するために、目の前の研究やフィールドと外の世界と常に対比させるとともに、本プログラムの成果、例えば、講座「活力ある超高齢社会のデザイン」の活用、周知等を行うことも有効と考える。